

『従順なカラダ 意固地な唇』

著:前田 栄

ill:四位広猫

「う～ん。久谷先輩と打ち合わせしておいたほうがいいかなあ」

「何を？」

背後から突然掛けられた声に、晶は驚いて抱えていた本を取り落としそうになった。

「に、兄さん。驚かせないでよ」

「すまん。そろそろ食事に行こうかと思って」

その言葉に時計を見遣ると、確かにそろそろ夕食時だ。

「もうそんな時間か……気付かなかった」

「そんなに必死に働かなくてもいいぞ。特に、本の整理は体力も使うだろ？」

「うん。なんか手とか足とか腰とか、明日辺り筋肉痛になりそうな気がする」

「風呂でよく体を解しておいたほうがいいぞ」

笑いながらそう言った後で、兄が「それで」と呟いた。

「久谷の御曹司となんの相談があるんだ？」

その声が何か妙に尖っているような気がする。

なんでだろうと思いながら、晶が答えた。

「週末の友人からの誘いを断り続けてるから、その理由。友人たちは、俺が久谷先輩に呼び出されたこと知っているから、それ以降、週末がダメになったことと、それを結びつけて考えないはずないんだよね。でも、OB講演会の演者に久谷先輩が兄さんを選んだって話は、まだ内緒だから」

「……彼の会社のほうの用事ってことにはしておけないのか？」

「生徒会の用事でって最初に言ってたの聞いているはずなんだ」

「そうか……」

少し考え、兄が呟く。

「家の用事で週末が潰れていると言うしかないんじゃないか？ とりあえず、嘘じゃないだろ？」

「うん。でも……」

「でも？」

「幼等部から一緒だから、家の事情ってどんなのだって聞かれることは間違いないし。問い詰められたら、たぶん兄さんのとこに来ているって言っちゃいそうで」

「俺のこと知らないのか？」

そう言って、兄は驚いたように目を見開いた。

瓊徳学園での級友、それも仲のいい友だちとなると、相手の家族構成まで把握しているのが普通だ。

それで知らないとなると、故意に隠しているということになるだろう。

でも、もちろんそんなことじゃないので、慌てて晶は続けた。

「兄さんがいると言ったことはあると思うけど……そういうことじゃなくて」

「……………」

「一人、ムチャクチャ好奇心が強いヤツがいて……あ、悪いヤツじゃないんだけど！でも、ずっと不在だった兄が帰ってきたと言えば、きっと見てみたいって言うと思うんだよな」

「俺がおまえの兄だとバレると、おまえの周りが煩くなりそうだな……言いふらすような奴なのか？」

「そいつは問題ないと思う。ストッパーもいるし。問題はもう一人でさ。そいつも悪い奴じゃないんだけど、なんていうか……迂闊なんだ」

「……迂闊なのか」

「うん」

そこが有田の可愛いところではあるが、洩らされては困る秘密というのが『超有名人の兄がいる』という類のものだとヤバすぎるというものだ。

「そうすると、『家庭の事情で詳しいことは話せない』で、押し通すしかないんじゃないか？」

「……そうなんだけど」

「だけど？」

「十年來の友人で、互いに秘密にしてることなんてほとんどないから、なんか変な感じなんだ」

苦笑混じりの晶の言葉に、史は少し考えてから呟く。

「でも、俺が勘当されているという話はしてなかったんだろ？」

「アメリカに留学したことは言った気がする。向こうが覚えてるかは解らないけど」

「つまり、聞かれたことに答えなかったり、嘘をついたことはないから心苦しいということか？」

自分の中でもややもやしていたものをズバリと言い当てられ、晶は驚いて頷いた。

「そっか……そうなんだ」

そんな晶を見ながら、史が呟く。

「成長するに従って、秘密は増えていくものだろ？ 彼等だって、おまえに言えないことや、尋ねられても答えられない類のことはあると思うぞ」

「……そうだね」

確かにそれは当然のことだ。

解っているけど、なんとなく寂しいような気がするの、自分が子どもだからだろうか。

兄は、家族にも友人にも言えないような秘密をどのくらい持っているのだろうか？

そう思いながら見上げた兄は、何を思っただけ不思議な眼差しでじっと自分を見つめていた。

「……兄さん？」

「秘密を作ってやろうか？」

「……………」

何を言われているのか解らずに首を傾げた晶に、兄は「いや、食事が先か」と呟く。

「何か食べたいものはあるか？」

「え……いや、別に。兄さんが連れて行ってくれる店、どこも美味しいし」

「じゃあ、前に言ったスペイン料理でいいか？」

「うん」

あの後調べたスペイン料理はどれもみな美味しそうで、楽しみにしていたのだ。

案の定、連れて行って貰ったレストランで出てきた料理はとても美味しいものだった。店員もフレンドリーかつ優しくて、兄が土産にと注文していた例のジャガイモ入りのスペイン風オムレツは、とても二人分とはいええない量かつ他のおかずまで付いてきて、馴染みの客のはずの兄のほう苦笑していたくらいだ。

店では未成年者に飲ませるわけにはいかないからと言って、兄が買ってきた店特製のサングリアを風呂上がりに少し。

ここのは美味しいから飲んでみろと差し出されたそれは、たくさんのフルーツが入っているせいかとても飲みやすく、気付くと注がれていたグラス一杯総てを飲み干してしまっていた。

「美味いだろ？」

声に振り向くと、自分と違いシャワーだけで済ませたらしい兄が、髪を拭きながら近づいてくる。

本文 p90～94 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>